

第七章 客愁空しく佇立（ちよりつ）す

開元十五（七七）年の冬。

曇天のもと、丈高い枯草が弱い風に揺れる。そのひそやかなざわめきの間より背を伸ばし、彼方の丘の縁に注意を向ける。前を歩く二人は話に夢中で、孟浩然のその動きに気付かない。

今日はいない。丘のその場所は、南園の境界の外であり、隣のト（ほく）氏の園地からも離れ、滅多に人が立ち入らない。いつであったか、そこに孟大が一人でいるのを、いまと同じく張野人の小屋に向かう途中で偶然見かけた。大きな体は遠くからでもすぐにわかる。胸に痛みが走った。急いで草の蔭に自分の姿を隠した。以来、それとなく注意していると、時折、孟大はそこにいる。

一度だけその場所に立ってみた。背に山を負って、林の木々に包まれるような感覚があった。眼下の窪地は草に覆われ、その先に灌木が一行に茂り、その先に河原があり、その先に川があり、その先に鹿門山がある。右手遠くに南園、左手近くにト老人の瓜畑。孟大が来る理由がわかったような気がした。

孟大、孟四、孟浩然の三人が心を合わせて、南園の大元に立ち戻ろうとしたのは七年前。好転の兆しはすぐに現れた。いまになって振り返ると、よかつたのはせいぜい最初の一年で、長く見ても二年だった。

孟大が、南園に生きると孟浩然に告げたのは、それよりさらに十数年前。以来、数百の「忍」の字を記すようにしてそれを果たそうとした。南園が好転しかけた短い間だけは、肩に架かる重みもいくらか軽減されただろうが、その後は増すばかりだ。忍ぶには丘の縁に来なければならぬのだろう。

いま孟大がいらないことに少しく安堵する。だからといって、今日これから決めることは変わらないだろう。まだ決めてはいないが、違う結論に至る可

能性はほぼない。孟邕、孟郊とともに張野人の小屋に行くのは、かねてから考えていたことがもはや止められなくなつたからだ。年の瀬を前にして旅に出る。行くのは都だ。官職を得るために。二人はまだそれを知っていない。

小さな土手を上る。

張野人の小屋に向かうとき、習池に寄るのがいつもの順で、二人ともそれを心得ている。

孟邕と孟郊は仲の良い叔父と甥だ。これまでは一人ずつ張野人の小屋に連れた。張野人をあまり煩わせたくない。二人が揃うと、とかくやかましい。曇天のもと、習池は鈍い色をしている。まばらに並ぶ柳は大方の葉を落とし、風のない中空にだらりと枝を垂らす。岸边近くの葦に枯れた花の穂が残り、いよいよ本格的な冬景色になるのをことさら強調している。そのかたわらに数羽の鴨が動かずに浮かんでいる。鴨たちはこれからの冬はここで過ご

すと決めたのか。それともなお南を目指すのか。

孟浩然は、二人がひととき無言になったのを捉え、

「なぜ山公はここで泣いたのか。君達はわかるかい」。

すぐに返答はない。

孟郊も孟邕も一人だけなら即答するだろう。孟浩然の前では互いに譲り合
う。孟郊は叔父を立て、孟邕は南園老直系の四代目を立てようとする。二人
を比べると、若い孟郊の方が年長者であるかのように見えることもある。孟
郊はいずれは自分が南園を率いるようになるとの自覚を強く持っている。父
と同様に、妻を娶ったときに貢挙を受けるための勉強を止め、五代目となる
であろう子もすでにいる。孟邕は大酒呑みの父の後継者になろうとは考えて
いないだろうが、いつも軽薄な物言いで学舎ではしばしば楮先生に迷惑をか
けている。不思議と勉強の出来は悪くない。いまも独り身である。

孟邕は、全く聞いていなかったようなきよとんとした顔をして突っ立って
いる。横から孟郊がそれをちらちらと見る。いかにも口をききたそうだ。孟

郊は、常にはつきりとものを言い、人より一步前に出ようとする性向があり、時にそれで揉め事を起こす。

孟郊は次第に焦れて、

「兄さんはどう思われるのですか。先に言ってみて下さい」。

孟邕はごく間延びした口調で、

「僕がですか。ええと、何でしたか、僕は何を言えればいいのでしょうか」。

孟邕はわかかっていて、孟郊に我慢できなくさせようというのだろう。

「何がって、叔父上がお尋ねになったではありませんか。山公です。山公がここで泣いたのはなぜだったのかと、お尋ねになったでしょう」。

「ええと、そうでしたっけ」。

「兄さんは、山公がわかっているのですか」。

「山公でしょう。山公と言ったら例の山公ではないですか。要するに、あの有名な、誰もが知っている山公でしょう」。

「そうです。山公です。山濤の子の山簡です。山簡はこの習池に来ては大酔

して泣いたのです。その訳を叔父上がお尋ねになったのです。兄さんは答えられるのですか」。

「それはきつとかなり昔の古い話なのでしよう。昔の人がどうして泣いたのかと訊かれましてもな、いまさら当人に尋ねることはできませんし、それに、訳もなく泣くつてことは、世間にはざらでしょう。ここはどうでしょうか、理由などはないというのではないけませんか。何なら、ここでちよいと僕が泣いてみせましようか。そこには訳などまるでありません。当人が言うのだから間違いないません」。

子壘が威張った態度を作ると、

「どうやら兄さんは山公がわかっていないのでしよう。だから、まともに答えないで、いい加減なことを言っているのですよ」。

「だったら、君はわかってるのかい」。

「僕は兄さんとは違います。兄さんが知っていないといけないので、ちゃんと言っておきますと、かなり昔というのは四百年と少し前です。人の心は四

百年くらいで変わるものではないでしょう。僕等にわからないものではないでしょう。異なるのは世の中の情勢です。四百年と少し前に、ここ襄陽は大変な状況にありました。兄さんのために説明しますと、北からも西からも押し寄せて来る蛮族たちの荒波に呑み込まれてしまう寸前にありました。事態が差し迫っているのを、山公は十分に承知していました。しかし、打つ手がありません。僕等はその後の歴史を知っていますから、打つ手を見つけられなかったのは山公が愚かだったからではなく、歴史の奔流によって確かに打つ手はなかったとわかります。それだけ激しい荒波だったのです。山公は、ここにいるのが自分ではなく父であったならば、どうにかできるのではないかと、己を責めました。何もできずにいるのは、まことにもどかしく、情けなくもあつたでしょう。人々が営々と築き上げて来たものがいままさに失われようとしていて、それを防がなければならぬ立場に自分がいて、しかし、何もできないという冷徹な事実と向き合っていたのです。やり場のない思いにここに来て、大酔して泣く他はないとは、なんと痛々しいではありません

か。山公のことをいまここで思うと、僕の胸は張り裂けそうになります」。

孟郊の言葉に熱が籠る。

それが孟浩然の胸を熱くさせる。当時の襄陽といまの南園がそのまま比べられるものではない。当時の山公といまの孟郊がそのまま比べられるものではない。それでも、孟郊は自身を山公に重ね合わせているのだろう。

孟郊は顔を紅潮させ、

「いえ、僕は言葉の間違えました。山公は、僕なんぞに痛々しく思われるような人ではありません。山濤の子がそうであるはずがありません」。

山公は父の山濤に及ばなかった。南園老の子は南園老に及ばない。孟郊は誰よりも父を敬い、誰よりも父の弱さを知っている。

孟浩然は敢えて穏やかに、

「郊君が言うのを聞いて、君はどう思ったのか、よかったら聞かせてくれな
いか」。

孟郊はさらにのんびりとした口調で、

「ああ、僕ですか。僕がどう思ったのかということですか。まあ、山公のことは親切に教えていただいたので、だいたいわかりました。泣いたのにもしも訳があるとするならば、まあまあい言ったその通りなのであります。たぶんそれしかないと書いてもいいのでしょうか。だったら、それで話は終わりなのでしょうけれども、僕には、どうやら違うように思えなくもないのです。どうなのでしょう。でも、まあ、やっぱり、これでいいのでしょうか。せっかく聞いて下さって、郊君が言った通りですと答えたのでは、何も考えていないと思われかねません。郊君に媚びているとも思われかねません。ここで、何かしら違うことを言っておかないとたぶんいけないでしょう。それで、何かあるでしょうか」。

斜めの空を見上げる。

「兄さんは何をぐじゃぐじゃと言っているのですか。僕に媚びているなんて誰も思いません」。

「泣いた理由は君が言った通りだと認めるのはいいのです。ただ、それが六

郎兄さんへの答えでよろしいと僕が言ってしまつては、筋を違えてまで君に媚びていると批判されても仕方がないと思うのです」。

「兄さんは何を言っているのですか」。

「君は尋ねられてもいないことを答えて、それを僕が是認したら、どうしたつて変でしょう」。

「僕は叔父上のお尋ねにきちんと答えました。のらりくらりと意味のないことを言うだけの兄さんとは違います」。

孟浩然は、

「私は何を君達に尋ねたのだろうか」。

孟邕は孟郊の肘を押し、

「ほら、聞かれています。君、答えなさい。いつも一番に答えるのが好きなのですから」。

「いまのは兄さんが問われたのです。違うと言ったのは兄さんなのです」。

「そうかなあ。違う答えをしたのは君だろう」。

「とぼけるのはやめて下さい」。

「君を怒らせてはいけないので、とにかく初めに戻るとしますかな。叔父上は『なぜ山公はここで泣いたのか。君達はわかるかい』とお尋ねになった。君はそれを、泣いた理由を問われたと曲解した。叔父上がお尋ねになったのは、そうではなくて、この場所を選んだ理由です。そうでなければ、面白味がありません」。

孟浩然は笑い、

「私は漠然と尋ねただけだ。言われてみれば、ここを選んだ理由も訊いてみたかったのかも知れない。山公が泣いたと伝えられているのはこの池で、ここには何回も来たらしい。とすると、何か理由があっただろう」。

孟浩然是心の内で、孟大が丘の縁に立つ姿を思い浮かべる。人それぞれに選ぶ場所があるのだろう。

「さあ、兄さん、答えて下さい」。

今度は孟郊が孟邕の肘を押す。

「僕が答えるのですか。答えてもいいのですが、でも、どうなのでしょう、理由が要るのでしょうか。最初から言っているように、泣いた理由はなくていいのではありませんか。ここを選んだ理由だつてなくていいのではありませんか」。

「そうやってごまかすのですか。話をぐだぐだにしてしまわずに、真面目に答えて下さい。叔父上の前なのですから」。

「六郎兄さんがどうしても理由をお聞きになりたいのなら、理由らしきものを作ってもいいでしょう。お望みですか」。

孟邕に言われて、かつて孟大が墮涙碑の前で、理由がないからこそ悲しいと言ったのを思い起し、二人にその話をする。

孟郊は俄かに悄然として、

「父がそんなことを言っていたのですか。だから、あの人はいけないのです。事を明確にさせないで、そっくりそのまま自分の身に引き受けてしまおうとするのです。それで身がもつはずがありません」。

そのように言うのを、孟嘗は無頓着に遮り、

「一郎兄さんはともあれですな、ここは六郎兄さんに媚びて、理由はあつたとしましょう。それでも悪くはないでしょうから。そう決めてしまったら、郊君だって安心して答えられるでしょう。どう考えますか」。

「兄さんは、どうしても僕に言わせようとするのですか。だったらいいです、言いましょう。でも、平凡な答えです。兄さんは、何か奇抜なことを言ってみようとしていて、でも思いつかないから、僕に話をさせて時間を稼ごうとしよう。それならそれでもいいです。この場所を選んだ理由は、まことに単純です。町の喧騒から適度に離れ、独り静かに思いを巡らすのによかったからです。町から遠すぎてもいけませんし、池が広すぎてもいけません。遠く町から離れて、もしも雄大な風景を前にしたならば、思いは別のところに行ってしまうでしょう。町に近すぎて、池が狭かったならば、ちまちまとした問題に心は捕らわれたままとなってしまうでしょう。日常から適度に離れ、適度の大きさの景色が、思いを拡散させず、酒がじんわりと身に染

んで、泣くのに具合がよかったです。山公は泣きたかったのです。ここがそれにふさわしい場所だったのです。いまここに立っておりましたも、どうでしょう、そのように感じませんか？

孟篋はけらけらと笑う。

「山公がうちの親父さんならそれでもまあいいでしょう。いつもなら、酔っ払うと、そこらにいる誰かをつかまえて、とめどなく話をしてしまうので、たまには一人で静かに酒を呑んでみようかと、瓢箪を提げて、ふらふらとやってくるのなら、ここでいいでしょう。だけど、山公はうちの親父さんではありません」。

「兄さんの親父さんの話など誰もしていません」。

「そうそう、うちの親父さんの話など誰もしません。親父さんは南園一の拗ね者で、酔って管を巻き、皆の顰蹙を買うのを生き甲斐としています。あれはあれでなかなか大変なのです。単純な酔っ払いでないということは、人様にはたぶんわかってもらえないでしょう。わかってもらったら、それはそ

れで親父さんとしては嬉しくないのでしょうか。面倒な人です」。

「もういいから、山公の話をして下さい」。

「山公ですか。山公という人は、気の毒にも拗ね者ではいられず、立派な人だったのでしよう。当時の襄陽で一番偉い人と言っていたのでしょうか。偉くなくても、一番有名だったのでしよう。何しろ山濤の息子ですから。そのような人が、一人で酒を携えてこの池に来ますか。うちの親父さんならできないことでも、山公には許されません。一人で行きたくてもそれはできないとしたら、どうしますか。決まっているでしょう、思い切って滅茶苦茶たくさんの人を連れるでしょう。普通の供人では面白くも何ともありません。だったら、女がいいのではありませんか。女なら若くて美しいのがいい。飛び切り煌びやかな衣装を着せたらもつといいでしょう。酒を飲むために、大勢の女を引き連れて、賑やかに町を繰り出すのです。あまり遠くへ行くのも大儀ですから、この習池くらいでいいでしょう。管弦の音を響かせながら、襄陽の人々の耳目を引き寄せて、習池まで派手な道中をしたことでしょう」。

子鬮は鼻先に華やかな曲を載せる。

「山公がですか」。

孟郊は、さも馬鹿馬鹿しいという顔をする。

「まあ、僕のいつもの悪ふざけです。山公がそうしたとは史書には記録されていないでしょう。もうやめます。これで終わりです」。

子鬮はわざとらしく手で口を覆う。

孟浩然は、

「よかったら、もう少し続けてくれないかい。私もこのごろはそのように思うことがある」。

「本当ですか。まさか」。

「六郎兄さんがそう言って下さるのなら、思う存分、言わせてもらいましよ」。

子鬮は手の甲を打ち、手振りを交えて、

「さて、山公は、ただいま申しました通りに大勢の美女を連れまして、いと

も華やかにこの池へと乗り込んで参ったのでございませう。で、この池であります。が、いまここにはこれといって目を引くものもない寂しさであります。が、当時も今と同じと思うのはまことに浅はか。そのころは、まるで違います。池を囲んで整然と楊柳が並び、木と木の間には四季の花が咲き誇り、水辺には芙蓉が艶やかに開いておりました。池の中だつて、このように何も無いのではなくて、贅を凝らした釣台が池の中央へと突き出していました。柱も欄干も鮮やかな朱塗り、屋根には竜をかたどった瓦が載り、燦然と輝く有様のまばゆいこと、まばゆいこと。その釣台の三辺の縁に、美女が順に妍を競つて座を占めますと、特別仕立ての美しい竿が渡され、一斉に糸を垂れたのであります。水面に映る美女の影に誘われて、魚が集まってまいります。針にかかりますと、たおやかな腕が動きまして、魚が釣り上げられます。女は笑いさざめき合います。糸竹の音がその間も流れておりまして、それはそれはこの上ない賑やかであります。山公はといひますと、釣台の中央に陣取つて一杯また一杯と盃を傾けています。いつまでも釣れずにいる女には罰とし

て酒を吞ませ、声自慢の女には歌わせ、自らも手を乱し足を乱して踊り、そしていよいよ歡樂極まりましたときに、大声を發して泣いたのであります」。

孟邕は踊ってみせる。

孟邕は、

「兄さんだったら、そのようにしてもいいでしょうけれど、理不尽すぎるように思います」。

「そうそう、君はうまいことを言う。理不尽です。理不尽だからこそ山公はそうしたので。そうでなかったら詰まらないですからな」。

「兄さんが詰まらないだけなのでしよう」。

孟浩然は、

「山公はまことそのようであったと思いたい」。

「まさか、叔父上も兄さんと同じようにお考えになるのですか」。

孟邕は笑って、

「これでも、六郎兄さんと僕は気が合うのです」。

と胸を張る。

孟浩然は、都に行くこと決まったならば、孟邕を連れようと考える。

「山公の父の山濤は竹林の七賢人の一人だ。山公にも、七賢人並みの奇行を志向する心があったとしても不思議ではない。七賢人といえば、もう二十年ほども前に、白鶴巖の肩にあった青巖庵で、張八君と顔五君と私の三人は、勝手に竹林の七賢人を気取っていた。張八君が山濤で、顔五君が嵇康だった。それぞれ合っていたものだといまさらながら思う。で、私は七賢人の誰と見られていたのか、君達にはわかるかい」。

二人はここでまた譲り合い、孟郊がやはり先に言うようになる。

「阮籍でしょう」。

「何だ。もともと知っていたのかい」。

「いえ、いま思い付いたままに言っただけです」。

「そうかい。私は阮籍に似るのだろうか。君はどう思うかい」。

孟邕は、

「先に言われてしまって、同じですと言うのは少々癪だが、だからと言って、無理に答えを違えるのも変なものです。仕方ありません、郊君と同じで、阮籍だと言いましよう」。

「二人がそう言うとなると、私には阮籍と似るところが確かにあるのだろうか」。

「七賢人の中で、叔父上の詩と共通するところがありそうに感じるのは阮籍ですから」。

孟郊が言うのに重ねて、

「それは違いますな。阮籍といえは、何といっても、あてどなく車を駆って、袋小路に入って、大泣きをしたという話が有名です。六郎兄さんとはそこが似るのです」。

「私にそのようなところがあるのだろうか」。

「だって、わかるではありませんか。いまから袋小路に向かって行こうとしているのでしょうか。それで僕等を張野人さんの小屋に連れて行こうとしてい

るものではありませんかな」。

孟浩然は驚く。

「ああ、やはりそうなのですか。またなのですか」。

と、孟郊も言う。

「君たちは二人揃って何を言っているのかい」。

孟浩然はとぼけてみせるが、孟郊は、

「僕と兄さんの二人をおじさんの小屋に連れようとした時点で、これはあやしいとすぐに思いました。今度で四回目でしょう」。

「四回目とは、何の数かい」。

孟郊は笑い、

「もう白々しく言わないで下さい。この前、郊君を連れて廬山の麓にまで行ったのが三回目です」。

「その前に、岳州に行ったのが二回目です。一回目は鹿門寺に籠ったことです。つまり、叔父上が南園を不意に離れたのが、この次で四回になるのです」。

「そのような勘定をしていたのかい」。

「で、今度は誰と行くのですか。一回目は張子容さんと、二回目はおじさんと、三回目がおじさんと郊君でした。四回目は誰なのですか。どうせなら、山公のように大勢の美女を連れたらどうなのですか。いや、大勢でなくていいです。一人で十分。六郎兄さんが、色恋沙汰で南園を飛び出して、どこかへと駆け落ちしたら、皆が驚いて、大いに愉快ではありませんか」。

「そうかい。私も一生に一度くらいなら、何かしら艶めいた話があってもよかるうか」。

「そうです、そうです。ぜひそうして下さい。どこの女性ですか。やんごとなきお方で、連れ出すのが難しいのなら、僕がお手伝いします。高く厳重な扉でも打ち破って、その人を盗み出してみせます。美女と六郎兄さんが駆け落ちするのなら、決して二人で袋小路で泣くようなことはさせません。恋がすばらしく成就するようにしてみせます」。

子壺が楽しそうに言うので、

「実のところは、そうなのだ」

孟浩然は思い付いた詩を詠じてみせる。

青楼暁色珠簾映

漆塗りの閨楼に掛る珠の簾に朝の光が及ぶところに

紅粉春妝宝鏡催

宝玉で飾られた鏡の前で化粧をしていますと

已厭交情憐枕席

あのころの情が溢れてまいます

相将游戲繞池台

手を取って池のまわりで戯れたこともありましたの

に

坐時衣帶縈穢草

いま行けば、衣に草がまつわりついて

行即裙裾掃落梅

落ちた梅の花を裾が掃くことになりましょう。

更道明朝不当作

どうせ明日になったところではり

相期共鬥管弦来

あなたと管弦をとともに奏でることはないのです。

子匳は手を叩き、

「駄目じゃないですか。

これでは、もう失恋しているではありません。あき

らめるのが早すぎます。

まだまだ脈があるのではありませんか。僕が何とで

もしてさしあげます」。

「君には感謝するが、まあ、君の手を煩わせるまでもなく、私はどういふ訳か、元来このような情からは疎いのだ」。

孟浩然は笑う。

「そうなのですか。六郎兄さんがいま言われたのはまこと疑わしいと僕は思います。だって、いまの詩はどうしたのですか」。

「このような詩さえも、少しばかりその気になれば作れてしまうのが、恐らく私の最もいけないところなのだろう」。

孟浩然是苦いものを噛みしめるようにして言う。いまの詩は、そうするために作ったようなものだ。一筋の道から離れて久しい。

孟郊は、

「兄さんがおかしな妄想を言い出すから、叔父上がわざわざ詩をまで作って少しばかり付き合って下さったのです。叔父上は、だいたい、女性のために心を乱したりなどしません。自然の風光の中での穏やかな心境を好まれるの

です。兄さんだってよくわかっているでしょう」。

「そうですね。本当は違うと僕はにらんでいます。いまはどうか知りませんが、少なくともかつては六郎兄さんは心を乱したはずですよ。違いますか」。

「何を言い出すのかい」。

事実として自分は恋と無縁で来た。そのような情が、最初から一切具わっていないからそうなったのではあるまい。そうなら、たとえ戯れでもいまのような詩は作れないだろう。元来はあつた情が、何かの理由で浮かび出なくなったのだろう。理由があるのなら、あの一事しかない。いつまでも三姉妹でいてはならないと、自分の感情に封印をした。本当は、恋の情こそを消し去ろうとしたのではないのか。

孟浩然は、そこまでで過去を振り返るのを止める。目の前に、その女性の息子がいる。

孟篋は、

「六郎兄さんの詩を読むと、郊君が言ったように、自然の風光の中での穏やかな心境を好まれると、確かに感じはします。けれど、六郎兄さんをこうして見ていると、それは違うのではないかという気になります。だってそうでしょう。この六郎兄さんなのですから」。

「ほう、この私だとなのかい」。

「いえ、もう少し正確に言うと、穏やかな心境を好まれるのはそうなのでしよう。そこまでは否定しません。でも、本当に穏やかな心境から詩を詠んでいるのかというと、それは違うのでしよう。龐徳公がそのようなことをしましたか。龐徳公はわざわざ自然の中で詩を詠んだりしていません。恋にしても、男女の情は自ずと誰にでもあるものです。それと六郎兄さんが無縁なように見えるのは、本当は、正反対であるからなのでしょう。だって、六郎兄さんは、いままさに袋小路に飛び込んで行こうとしているのです。それが駆け落ちならまだしも、そうでないとしたら、相当に考え物ですな」。

「兄さんは、またぐちやぐちやと、わからないことを言って。とにかく、駆

け落ちならなおさら、四度目はお止めしなければならぬと僕は思っています。叔父上は南園のために悩んでおられるのでしよう。それこそは何としてでもお止めしなければならぬと僕は思っています」。

「六郎兄さんが駆け落ちしたならば、いまの詩よりずっと情の籠ったいい詩ができるでしょう。それを逃すのは惜しいですな」。

孟浩然は、孟邕の言葉の途中で衣を翻し、

「とにかく、叔父貴の小屋に行こう。いつまでもここにおいても仕方がない。続きがあれば、向こうに着いてからだ」

さつと土手を下る。

都に行こうと考えるのは、孟大のためであり、南園のためであり、そして自分にとつてもっと難しいことのためだ。それらが一体となって、都へと駆け立てる。

七年前に、孟大、孟四、孟浩然は心を一つに合わせようとした。

孟大は元来の明るさを取り戻し、孟四は毎日学舎に顔を出して褚先生の助手として他の弟子の勉強を指導するようになった。学舎は和やかな雰囲気に変わった。孟浩然是病から脱した。孟大とともに農作業に親しむと日に日に健康を取り戻し、南園の外に出て、襄陽の有力者や都からの訪問客と積極的に交わるようになった。詩で得た名を、立身出世を求めるのではないかたちで南園のために役立てようとした。

猫親父の孟演に頭を下げた。孟演と対立しているようでは南園の再建はおぼつかない。孟演の返答は、孟敬規がかつて万山で言ったことと符合するものがあつた。「わしは父に二つのことを言われた。『南園が減びる瀬戸際にまで至つたならば、取り戻しがつかなくなる前におまえの好きなようにせよ』。わしは南園の状況を見て、いよいよそうしなければならぬと考えていた。父はもう一つのことも言った。『浩然の頼みだけは、一度でいいから聞いてやってくれ。あれはわしの最愛の曾孫なのだから』。このわしにとって君は可愛

いくはないが、父の言い付けには背けない。二つの条件を示そう。わしは商売人だ。見返りが期待できない約束はしない。南園からもしも官人が出た暁には、わしの商売の手助けをしてもらいたい。そなたがそれを約束してくれるのなら、楮先生は南園にいてもよしとしよう。もう一つは、見苦しい振る舞いをするなどということだ。父が美しく作り上げた南園が醜くなるのを座して見ていることはできない。そなたたち三人の仲が崩れ、南園がまたばらばらになるようなら、わしは好きなようにさせてもらおう。そのことを肝に銘じてほしい」。

南園老はお上に従順な農民ではなかった。南園を繁栄させる種々のからくりを作り、自分の死後も、そのからくりが動くようにと、一方では楮先生を招き、一方では孟演を外に出した。南園老の死後、孟漲、孟敬行と二代続けて、からくりを錆びつかせるばかりで、あちこちに不具合が生じた。孟振が汚れ役となつて、どうにか急場をしのいで来た。孟演は、時代に合致したからくりの動かし方を支援してくれ、南園は随分と楽になった。孟振は出番が

なくなったためにはなはだ不興顔で、南園の中で小さないさかいをしばしば起こし、孟大に面倒をかけるようになった。

孟敬行は家督を孟大に譲った。南園の状況が好転したのを潮時と見たのだろう。後から振り返ると、そのときすでに短い好調期は終わりに入っていたようだ。

そのすぐ後に、孟郊を連れて廬山を見る旅に出た。張野人が舟を出してくれた。張野人の小屋には、何時の間にか以前と同様に通うようになっていた。孟郊は、父の次は自分であるとの意識をより強めていた。廬山を實際に間近にして、張野人と孟郊とともに、郷里に生きる意味を考えたかった。旅を経て、南園に一筋の道を見出せるようになるのではないかとも思った。しかし、陶淵明には遥かに及ばないと痛感させられ、心に適う詩が岳陽樓以降これと違ってない状況が続いた。

張説が中央政界に復帰した。病に倒れる前だったら、好機到来と直ちに動いていただろう。孟浩然の心は揺れた。詩を使って都に雄飛すべきではない

か、張説にもし招かれたならばいかにすべきかと、秘かに思い悩んだ。

孟四は好調を維持し、折しも、孟四は地方の予備試験をついに突破した。

孟浩然是、自分ではなくやはり孟四が官人になるべきだと思い返し、孟演の手も借りて、都の名士に孟四の名を売り込もうとした。まさにそのときに張説が都から出された。

張説は都には短い期間しかいらなかった。財政政策で主流派と争って一歩も引かなかつたからだ。

国勢が上向きになるとともに国家の支出は増加し、一度膨らみ出したものは止められず、収入不足が深刻になった。名族出身の宇文融（うぶん ゆう）を中心に、税の取り立ての厳密化が進められた。国家の管理から漏れている民と土地を掘り起して税を正しく徴収するならば、不足分を補えるどころか大幅な超過も見込めるとして、限定された地域で試行し、かなりの効果を上げた。張説はこの政策は、民の活力を奪い、引いては国家の力を損なうと反対した。律令制度の弛みを正すという点で宇文融に理があり、玄宗皇帝はそち

らを選んだ。一方で、則天武后以来の施策は律令制度の縛りを緩めて国と民の繁栄をはかろうとするもので、それを担って来たのが主に貢举出身の新興官僚だった。

張説の追放が痛手となり、孟四の売り込みはよい感触が得られなかった。都に向かう孟四は自信に満ちた態度をとっていたが、いささか不自然で、孟浩然は暗い予感を抱いた。万全を期して、褚先生自身と子馨が同行した。褚先生は愛弟子のそばで試験の直前まで寄り添おうとし、子馨は従兄弟の中で最もものんびりとした性格で孟四の緊張を解きほぐそうとした。またも不可解な不運に見舞われ孟四は力を全く出せなかった。孟四が帰郷すると、父が息子を抱いて号泣する光景が再現された。以来、孟四は家に籠ったままとなった。

朝廷が採用した引き締め策の影響はじわじわと襄陽にも及んで来た。南園のからくりはにわかには動きが悪くなり、孟演も自分の商売を守るので手一杯となった。

孟敬行が死んだ。孟大は、褚先生の教えに従って二十七カ月間の喪に服そうとしたが、それが許される状況ではなかった。丘の縁の場所に立っているのが見られるようになったのはそのころからだ。

褚先生は孟四の失敗から病みがちとなり、身の役立て所のあまりない孟浩然は、子弟の指導を引き受けることにした。厳しくなる一方の南園経営にあって学舎の維持はいよいよ大きな負担となるばかりであったから、以前から燻る学舎への批判は孟浩然自身に向けられることにもなった。孟浩然が貢挙を受けて合格すればよいのになぜそうしないのかと詰る声も前々からだ。

孟演に約束した従兄弟三人の結束は危くなっていた。孟四が試験を受けるために必要とした費用の大半は孟演に借りた。その借金の返還を求められたならば南園は立ち行かない。孟演も厳しい状況にあるのだから、何を言ってくるかわからない。

張説が中央に復帰した。張説はしたたかで、財政政策で争うのをやめ、全く別の手段を用いた。封禅（ほうぜん）を行うよう進言して、皇帝の心を掴み取

った。封禪とは、皇帝が行う国家最高の儀礼とされ、天下泰平を現出した偉大な皇帝だけに許される。唐は財政が好転したことを受けて、いよいよ隆盛期を迎えた。玄宗皇帝は封禪を行うにふさわしい皇帝であると、臣下も考え、皇帝自身も考える絶妙な時期を張説はみごとに捉えた。

張説を中心に、周到な準備を経て、開元十三（七五）年十一月、封禪が実施された。都から泰山まで、皇帝は百官を引き連れて往復し、その行列は数十里にわたって野を覆った。国の出費は莫大で、それを可能したのが、張説が反対した宇文融の財政政策だった。封禪を終えると、張説につながる人々は、宇文融の施策が民を苦しめていると盛んに言い立てた。

孟演が洛陽で客死した。その死は、南園には直接知らされないままに、長男の孟郁によって、葬儀が行われた。南園にある孟演の家を守る者や、襄陽の孟演の屋敷にいる者から断片的に聞くばかりであった。

南園にかつてない危機が迫りつつあった。それ以上に、孟浩然自身にもかつてない危機が迫りつつあった。

廬山を見る旅から三年ほどして、張野人に「十年、あるいは、二十年、三十年も先になつて生まれる詩を作つて後が大変ですなど、その昔に申したことがありました。あれからそろそろ二十年にもなりましようか。近頃では、龐徳公に不老長生術を教わつても、間に合わないような気がしております。人の一生とはまことはかにものですな」と言われた。孟浩然は、楊義姉なら「また巧んだでしょう」と笑うに違いない詩ばかりを作っている自分に苛立ちに近いものを感じていたので、俄かに色めき立ち、「山の氣に染まり過ぎたと言つたのは叔父貴ではありませんか」と、見当違いにも張野人を非難した。「近頃の坊ちゃんは、夕陽の味わいさえ忘れてしまわれたのではありませんかな」。山を歩いて佳句を得たと張野人に示しても、味気ない心持ちになるのは避けられなかった。

洞庭湖の上に一筋の道が消えてから十年、このままでいいはずがない。

小屋に張野人の姿はない。

孟郊は、置かれてゐる舟の縁を叩き、

「これがあるということは、きつといつものあそこでしょう。」

そう言う背中を孟邕が叩き、

「君はどうして最初からそれを言わないのですか。いつものあそこに決まっているではないですか。ここに来る前にそう言えばいいのに。六郎兄さんに面倒をかけて、怪しからんではありませんか。」

「叱られるのは僕なのですか。」

「それはここに君がいるからでしょう。いなければ叱られませんな。」

「兄さんだっているではないですか。」

孟郊が頬を膨らますのを見て、孟浩然は、

「確かに、今日のいま時分ならいつものあそこだ。私もうつかりしていた。どうして思い出さなかったのだろう。」

「ほら、君のせいで、六郎兄さんが困った顔をしているではないですか。そ

うでなくても、六郎兄さんは大変なのですから、君がしっかりしてくれなくては困るのです」。

「どうして僕なのです。兄さんはいいのですか」。

「三人の中で君が一番の年少だろう。だったら、君が一番しっかりしなくてはならないのが道理というものでしょう。それにこの中では、一応は自分がまともな普通の男だと思っっているのは、君だけでしょう。だったら、いろいろと気を遣ってくれないと困る。僕は飲んだくれの親爺の息子ですから、これですっかりしたら、皆の期待を裏切り、親の顔に泥を塗るようなものです」。

六郎兄さんが普通ではないのは昔から知れていました。それに、六郎兄さんにも、僕にも、いろいろと考えることがあるのです。別に考えることもなく、大変でもない君が、うっかり忘れたりしてはいけませんのです」。

「兄さんに考えることなどあるのですか」。

「始終いろいろと考えている」。

「例えば何なのですか」。

「そうですね、まず第一に挙げるとすれば、いまはやはり駆け落ちの段取りでしょう」。

「まだその話なのですか。もう終わったのではないのですか」。

「いやいや、これからが本番です。これは僕でなくてはできないことです。だから、僕が考えないといけないのです」。

孟篋は胸を叩く。

「駆け落ちはともかく、兄さんなんかを頼りにしたら、何一つうまくいかないと思います」。

「失礼な。六郎兄さんの望むようにしてさしあげられるのは、たぶん僕だけでしょう」。

「大変な自信ですけれど、駆け落ちなど、叔父上は金輪際しませんから、兄さんの出番はありません」。

「それはどうか。駆け落ちくらいししないと、もう人は驚かないでしょう」。

「叔父上は別に人を驚かせようと、いろいろなさって来たのではないでしょ

う。

「それはどうかかな」。

孟盦はにやりと笑う。

孟浩然は、

「ともかく、いつものあそこへ行こうではないか」。

と、二人を促す。

水路を穿って漢水の魚を導いて漁場としているのが「いつものあそこ」だ。近在の漁夫が集まってその仕組みを作り、いつ誰がそこで獲っているのかの決まりを定めている。張野人もその中に加わっていて、近頃は竿一本だけを肩にして行けばすむその場所でもつぱら釣りをし、舟を出すことは少ない。張野人もすでにかなりの年齢だ。舟がすっかり黒ずんでいるのが、この地で過ごした歲月の長さを思わせる。

二人を張野人の小屋に連れるのは、張野人が二人を気に入っているからだ。張野人と接触することで、自分と同様、二人の身にも何かが起こりはしない

かと期待もしている。

霍大叔母はよく思っていない。そうでなくても、二人と霍大叔母とは仲が悪い。霍大叔母は二人に会うと必ず何か一言ある。孟鼐は意味の通じない言訳を並べて霍大叔母を呆れさせる。孟郊は頑として聞く耳持たずで言い分けも反論もしない。孟郊は、亡き母が孟振と霍大叔母の夫婦に辛い目に会わされたのを聞いていることもあって、夫婦に対していつも頑なである。

「急に老け込まれたような気がしませんか」。

孟郊がささやく。孟浩然も同様に感じている。

いつもの場所に、それが本当に張野人かと疑わせるような曲がった背中がある。深く被った笠の下に、ぺったりと折り畳まれているかのようにだ。

「叔父貴ももう立派な年齢だ」。

孟浩然には、初めて張子容と小屋を訪ねたときの印象がいまも強く残って

いる。首の傷がおどろおどろしく、胡散臭さに満ちていた。霍大叔母が禁じるのも当然だった。孟邕にも孟郊にもそのころの張野人にこそ会わせたい。

張野人は膝の間に頭を埋めて眠っている。地面に釣竿が置かれている。

孟邕は魚籠を覗き、

「一匹もありませんな。代わりに僕等がいっぱいにしてしまいますかな」。

そりそりそりりと釣竿を引き寄せ、数歩離れた場所に移って糸を垂れる。孟

郊が隣に座り、孟浩然は二人と張野人の間に腰を下ろす。

水に目を注ぐ。

ゆらゆらとした流れに、張野人との歳月を思う。漢水のこのほとりで、張

野人は己の思うように生きたのか。張野人は自分をどのようになりたいと思っていたのか。

張野人の眠っている横顔を見る。

当たり前のように張野人はいてくれて、当たり前のように張野人は舟に乗せてくれた。龐徳公のように不老長生の術を得るのでなければ、張野人もい

ずれば世を去る。主がいなくなれば風雪を経た小屋はすぐに朽ち果てよう。張野人が生きていた痕跡はたちまち消え去ってしまうだろう。

張野人の舟で漢水の流れにもう一度乗りたい。それができるのもあるいはこれが最後なのか。

「兄さんには釣る気がないので。そのやり方では、百年待っても、小魚一匹かかりません。僕にやらせて下さい」。

孟郊が竿を取り上げようとする。

「君はわかっていませんな。釣る気がないどころか、僕は、実に慎重に釣らずにいる工夫を凝らしていたのです。神経をすり減らす僕とその苦労がわかりますか」。

「また変なことを言い出した。今度は何を思い付いたのです。釣らない工夫だったら、竿を引き上げればいいだけではありませんか」。

孟郊は脇からそのまま実行して、

「これでいいのでしょうか。針の先には何もかかっていません」。

「それでは話にならない。面白くも何ともない」。

「面白い話があるのですか。だったら、聞いてさしあげましょう」。

「長い無駄口をきくのは僕は大嫌いだから、短く言うのですな、下手をする
と、おじさんを針にひっかけてしまふ、その危険性に僕は気づいたという訳
です」。

「短すぎて何のことかわかりません。おじさんって言うのは誰なのです。あ
そこで居眠りしているあのおじさんですか。下手に竿を振り回したら、針が
あつちに飛んで行くってことですか」。

「君は何もわかっていない。信じられませんな。いいかい、この寒い曇り空
の下で、ああして平然と眠っているのは、おじさんがもはや寒さを永久に感
じないまでに冷たくなっているのか、さもなければ、あそこにあるのがおじ
さんの抜け殻だからです。まだ息は通っているようですから、おじさんは取
り敢えずうつしみだけを残して、水の中にいるというのが唯一の正しい事実
でしょう。おじさんが釣竿を手から落としていたのも、水の中にいる自分を

釣り上げてしまわないための用心なのでしよう。僕もすぐにはそれがわからなかったのだけれど、君はこれだけ言ってもまだわかっていないようですな」。

「おじさんは、体からするりと抜け出て魚になって泳いでいる夢を見ていると、兄さんは言いたいのでしょう」。

「夢ではありませんな。ほら、あれです」。

子甕は魚影を指差す。

孟郊は首を伸ばして、

「いいでしょう、兄さんの話に付き合いますよ。あれがおじさんなのですね。おじさんが魚になっているのは、おじさんには現実から逃れたいとの願望があるからなのです。はたから見ると、おじさんほど気楽に生きている人はいないようでも、実は違うということですか。僕だってそれくらいわかっていきます」。

「ほう、そうなのですか。僕は知りませんでした。おじさんはそうだったのですか」。

「とぼけないで下さい。人は見かけだけではわかりません。兄さんのところの親父さんだって、好きで酔っ払ってばかりいるように見えて、実は違うのでしょう」。

「どうだか、わかるものですか。わかるのは、君のように言われたら、うちの親父さんは喜ばないだろうということです。どうしようもない呑んだくれと皆から思われているのが好きなのです。おじさんもそうでしょう。世間離れした気楽な隠遁者であると思われたいのでしょうか」。

「人からどのように見られたいかなど、おじさんは気にしているのでしょうか」。

「疑うのなら、あのおじさんを釣り上げて、ぎゅっと絞り上げて、本音を吐かせてみますかな」。

子壺は竿を取り戻そうとする。

実際に魚が張野人のように見えて来る。張野人の本音というものは聞いたことがない。この先もきつとないだろう。それが張野人の生き方なのだろう。

魚はひよいと水面に顔を出し、

「ごちやごちやと諸君等は言っておるが、魚の楽しみなるものを、知っているのですかな」。

声に驚き、横を見ると、張野人がむつくりと首を持ち上げている。

「眠っておられたのではないのですか」。

「邕君には驚かされましたな。こっそり水の中で遊んでいるのを、見抜かれてしまいました。邕君は、どうしてどうして只者ではありませんな」。

「そうですとも、僕は只者ではありません。やっとわかっていただけましたか。酔っ払い親父の息子だからといって見くびらないで下さい」。

「いやいや、南園で畏怖すべきは、第一に君の親爺殿です。あの方なら、魚の楽しみがどのようなものであるのかよくよく御存知であります。君に訊いてもわかりますかな」。

「僕ですか。ほら、郊君が答えたがっています」。

「また僕ですか」。

「君がこの四人の中では、どう見たって一番まともなのですから」。

「またそれですか。兄さんこそ、只者でないと褒められたばかりではないですか」。

「いいから、いいから、君は答えたのだから、言ったらいいでしょう」。

「魚のことを最初に言い出したのは兄さんです。魚になって泳いでいたと言ったのはおじさんです。どっちも僕ではありません。僕にわかるものですか」。

と、怒り気味に言つて、すぐに、

「いいです、おじさんも兄さんも僕を試そうとしているのでしよう。わかっています。濠水（こうすい）の石橋の上で、莊子（そうじ）と恵子（けいし）が交わした有名な問答くらい、僕だつて知っています。無恥をさらけ出すのを見て、笑いものにしようと思つていたのでしよう」。

「少なくとも僕にはそんなさもない見はありませんな」。

孟浩然が口を挟み、

「成程、莊子と恵子が問答か。莊子は魚の心をわかっていたのかどうか、その問答を最初からなぞりながら、答えてみてくれないかい」。

「六郎兄さんも、学舎で若い者の面倒を見るようになって、近頃は、どうか教師らしい物言いが少しばかりできるようになりましたな。弟子に自ら答えさせようとするのはいい教え方です」。

子邕がからかうように言う。

「私もよくわからないので、この機会に皆で考えてみたいと思っただけだ」。
「それこそ教師のよく用いる言い回しですな。ここは、学舎の優等生の君から答えたらいいい」。

子邕は孟郊の肩を押す。

「わかりました、言いますとも。僕は実はこの問答を何だか変だとずっと思っていました。問答の始まりは、濠水にかかる石橋から魚を見て『これぞ魚の楽しみである』と荘子が言ったのでした。それに対して、恵子が言ったのは『君は魚ではない。魚の楽しみを知るはずがない』。すると荘子は『君は私ではない。私が魚の楽しみを知らないというのが、どうして君にわかるのか』。恵子は『僕は君ではない。僕はもとより君を知らない。君は魚ではない。君

が魚の楽しみを知らないのも、そのままだ』。そこまではわかります。その先になると急にわからなくなりませう。莊子も恵子も、ここまでは、要するにわからないということを書いてあるだけなのでしよう。

孟浩然はうなづく。

「莊子は『ここは根本に戻って考えてみよう』と言いました。それはいいのです。その次が変なのです。莊子はこう言いました。『君は、魚の楽しみを知ることがないと僕に言った。そのとき君は、僕が魚の楽しみを知っているのを知って、そのように言ったのだらう。橋の上で、僕にはそれがわかってたのだ』と。これって根本に戻って考えたことなのでしようか。しかも、問答はそれで終わりです。どうということなのでしょう。」

孟邕は、

「どうということって、もう十分だから終わりということでしょう。」

「どうして十分なのでしょう。」

「要するに言うべきことは尽きたのです。尽きたことをとやかく問われても、

答えようがありませんな」。

「そう言つて、兄さんは、ごまかしているだけなのでしょう」。

「君は僕ではないから、僕がごまかしているのかそうでないのか、君はどうしてわかるのかい。僕にはそれがわからない」。

「僕はわからないので、どういうことなのか尋ねたのです」。

「それでいいではないですか。つまり、わからないのでしよう。魚になつて泳いでいたおじさんには魚の楽しみはわからない。それで僕に訊いたのです。僕はおじさんではないから、魚の楽しみはわからないとおじさんがわからない。とすると、魚の楽しみがわかるということがわからなくなるのが魚の楽しみだということなのですな」。

「兄さんは、ますますわからないことを言う。わざと話をこねくり回して通じないようにしているだけなのでしょう。自分でも何を言っているのかわかつているのですか」。

「一向にわかつていませんな」。

張野人は手を叩き、

「やはり、邕君は只者ではない。邕君には魚になつた経験がありそうですね。地上にあつては人の楽しみは知れず、水中にあつては魚の楽しみは知れない。莊子のように地上にあつてこそ魚の楽しみを知り、あつしのように水中にあつてこそ人の楽しみを知るのです。先ほど水中よりお三方を見て、それぞれの楽しみをあつしは知りました」。

孟浩然は、

「私たちは地上にいて楽しんでいたのですか。それはどのような楽しみだったのでしょうか」。

張野人は大笑し、

「残念なことに、あつしもいまは地上におります。お三方の楽しみはいまはわかりません」。

「では、あの魚の楽しみならわかるのですか」。

孟浩然は魚影を指す。

張野人は覗き、

「あれは鰻魚ですな。鰻魚であつしが知るのは、食べたときの旨さです。旨い鰻魚がここに来ると、必ず釣り上げられて、人の口に入る。それが鰻魚の楽しみなのですかな。鰻魚は人に釣ってもらいたくてここに来るのですかな。鰻魚は己の楽しみを知らないから、ここに来てうかうかと釣り上げられてしまうのですかな。それはいかなる道理によるものか。あつしにはとんとわかりません」。

孟浩然は心が昂ぶり、座っていられなくなる。

立ってしばらく待つと、心がしかと定まる。このように決める以外にない。都に行く。

張野人も孟邕も孟郊も孟浩然を見上げている。この三人に決意を告げよう。静かに詠じる。

坐觀垂釣者

釣り糸を垂れる人をそぞろに見ては

空有羨魚情

釣り上げられて出世する魚を空しく羨むのです。

張説に献じた詩の最後の部分だ。

張野人はゆつくりと立ち上がり、

「では、舟をお出しするのですな」。

「叔父貴はどうしてわかったのですか」。

「坊ちゃんはいつでも隠しません」。

孟邕も立ち、

「四度目はどちらにいらっしやるのですか」。

孟邕も立ち、

「駆け落ちならば江南がよろしいでしょうな」。

「阮籍は袋小路に行き当たって泣き、山簡は習池で大酔して泣きました。最もわからないのが自分自身の楽しみであるのでしょうか。あの詩を献じたとき、張説様は後悔することになるうとおっしゃいました。都に行きます。そうする以外にないと、君達二人の前で、叔父貴に告げるために、今日はここに来たのです」。

「舟はいつお出しすればいいのですかな」。

「いまであれば嬉しいです。鹿門山の向いまで結構です。都へは徒歩で参ります。二十二郎君を連れませう」。

子壺は口を鳴らし、

「ほう、僕ですか。僕はこう見えても、なかなか鼻が利き、道を迷ったりしませんぞ。六郎兄さんの思惑通りに、袋小路にはまって泣いていただくようなことにはならないでしょう。しかも、行先は都なのでしょう。あそこは東西南北に道が走っていて、袋小路などそもそも存在しないのではありませんか。駆け落ちだったら、どんと任せていただきますのに」。

子壺が胸を叩くと、孟郊は、

「いつまでも変にふざけないで下さい。駆け落ちなど、ある訳ないでしょう。いえ、都に行くのだから、ないと思います。叔父上は、都に行つて何をなさるのですか」。

「宰相にでもなろうかと」。

孟浩然は小さく笑う。

「叔父上まで、兄さんみたいにふざけないで下さい。たとえ宰相でも、あるいは皇帝陛下から国を譲ろうというお話を頂戴するとしてもです、叔父上にはそれ以上に大切なことがあるではありませんか。都などに行かないで下さい。南園にいらして下さい。わかっていきます、都に行かれるのは、南園のためなのでしょう。南園のことなら父とこの僕に任せて下さい。僕だって何もできないわけではありません。廬山の見える場所に僕を連れて行って下さったのは叔父上御自身ではなかったのですか。僕はあれから変わりました。もしも陶淵明がいま生きているのなら、廬山の見えるかの園田より、岷山の見えるこの園田を選ぶようになってもらいたいと、本気で思っているのです。叔父上には南園にいていただきたいのです。どうか行かないで下さい」。勢い込んで言う孟郊に、孟翳はわざとらしく間延びした口調で、

「廬山と言いますとあの廬山。陶淵明と言いますとあの陶淵明。つまりは、誰もが知るあれですかな」。

と、陶淵明の『帰去来の辞』の冒頭を唱える。

田園將蕪　田園はまさに荒れようとしています

胡不帰　帰らずにいいものでしょうか。

「陶淵明はそう言っただけで郷里に帰りませんが、六郎兄さんは、順序としてその逆をしようというのですか。やはり普通の人は違います。『田園まさに蕪れなんとす、なんぞ行かざるや』です。陶淵明も変わっていたけれど、六郎兄さんはその上を行く。それも結構でしょう。駆け落ちでないのははなはだ不満ではありますが、しかし都に行けば、あちらには随分と結構な御婦人の方が大勢いらっしゃるのですから、駆け落ちになる見込みも大いにあります。うですな。それに望みをかけてお供させていただきますでしょうか。」

「兄さん、ふざけてばかりしないで、止めて下さい。」

「六郎兄さんは、思い立ったら行ってしまおうのです。これが四度目。つまり、六郎兄さんには、窮か通か二つに一つではなく、窮にして通、通にして窮なのでしょう。都に行かないと、窮と通のいずれから見放されてし

まうのです」。

「また、訳のわからないことを言う。僕はとても大事な話をしているのです。都に行かれるのは、叔父上の本意ではないはずです」。

「本意かどうか、君は、六郎兄さんの心がわかるのですか」。

「そう言う兄さんにはわかっているのですか」。

張野人は、

「さきほどの問答に戻りましたな。話しても埒が明かないのなら、舟を出すとしますか。お若い人の手がせつかくあるので、手伝っていただきますかな」。

小屋に向かつてのっそりと歩き出す。

子壱は釣り竿を肩に載せ、

「都に出て行って、突然、戦になることだつてありませんよう。こういう一見、泰平のときが怪しいのは、よくあることです。郊君がろくに止めてくれなかつたばかりに、僕等が都に行つて戦に巻き込まれ、殺されでもしたならば、漢水の流れからの岷山も鹿門山も、これが見納めですな。心して見るとしま

すか」。

と、張野人の後を追う。

孟郊は、

「何を言うのです。僕は止めているではありませんか。まだまだ懸命に止めます。陶淵明にとつての廬山は、叔父上にとつての峴山や鹿門山です。それを置いてどうして他所に行くのです。おじさんの舟から峴山や鹿門山を見てどうか考え直して下さい。ぜひそうして下さい」。

孟浩然の目が潤む。

張野人も孟邕も孟郊も、それぞれに自分のことを考えていてくれている。

自分は何を求めているのか。袋小路で泣くことか。陶淵明とは逆に、南園に戻れなくなるのを望んでいるのか。

「ここからは僕に任せていただきます」。

孟郊が舳先ににじり寄る。

張野人は、先ほどから棹を少しも動かしていない。舟は水に従って流れている。

孟郊が棹に手をかけると、張野人は無言で場所を譲る。

「兄さんは艚を漕いで下さい」。

孟邕は止めていた腕を上げ、

「僕はいつでも君の言いなりです」。

「これまで一度だってそのようなことがありましたか」。

「いつも素直すぎるので、君は何とも感じていないのでしよう」。

孟邕が艚を動かして孟郊が棹を操ると、舟はゆっくりと回転を始め、舳先がぴたりと鹿門山に向く。

雲が切れ、日の光が薄く漏れ出し、山の一部を明るくする。その光が川にも降りて来て、舟に及ぶ。

孟浩然是存外の暖かさに包まれる。それは、日の光のせいばかりではない

だろう。三人がいて、とりわけ張野人がいるからだろう。

張野人は掌で舟べりを軽く叩き、何かを探すかのように首を左右に廻らしている。

「あれは何でしたかな」。

「あれとは」。

「そうそう、あれでした。齡をとると、思い出すのもひと苦労です」。

ひゅうと口を鳴らしてから、ゆつくりと唱え始める。最初は聞き取り難い低いしわがれ声から、次第に、昔通りの伸びやかな高音になって行く。

舎舟眺廻渚 舟を置いては遥かな渚を眺め

停策倚茂松 杖を停めては茂る松に寄り添います。

側逕既窈窕 松から奥の道はほのかに細く

環洲亦玲瓏 渚をめぐる水は明るく流れます。

俛視喬木杪 水辺の木の梢を下に見て

仰聆大壑濃 谷間のせせらぎの音を上に聞きます。

張野人は舟べりをぼんと叩いて、口をつぐむ。

子壺が、

「ええと、それで終わりなのですか。何だかまだ中途半端なような。続きがあるのですか。いまはおじさんの即興の詩なのですか」。

張野人は笑って、

「これがあつしの詩だったら、大した詩人の仲間入りですな。坊ちゃんも裸足で逃げましょう」。

子壺は、

「兄さんはわかっているのでしょうか。それでいて、わざと言っているのでしょうか」。

「ほう、君は知っているのですか」。

「いつだったか、先生に教わったではありませんか」。

「そうだったかな。僕は、学舎ではいつも半分は居眠りをし、残りの半分はおしやべりをしているから、なかなか先生の話聞く余裕がないのです。先

生というのはこちらの六郎先生ですかな」。

「いえ、叔父上ではなく、楮先生です」。

「とすると、しばらく前ですな。忘れてしまったようですな。楮先生が珍しくも、おじさんの詩を講義したのに、聞き逃したか、忘れたか、いずれにしても不覚を取りましたな」。

「おじさんの詩ではありません。おじさんがいまここで作った詩を、どうして、先生が何年も前に講義されるのですか」。

「そういうことがあったら楽しいではありませんか」。

張野人は舌を鳴らし、

「いやあ、これは参りましたな。おたくの大叔母さんはさすがですな。おっしゃることは正しい。あつしの小屋に出入りしているために、坊ちゃん方は揃っておかしなことになってしまいましたな」。

孟郊は、

「僕は変ではありません。こちらのお二人は生まれながらにして変なのです」。

おじさんのせいではありません」。

「君は変ではないから、いつも人を押しつけてしゃべる割には面白くない。それでいて、おじさんの舟にこうして乗っていられるのだから不思議だ」。

孟浩然は、

「いつも君達には変だと言われるけれど、私はやはり変なのかい」。

「魚の楽しみは魚には知れず。変な人には変であることがわからない。変ではないと言ひ張る君が答えるのがいいでしょう」。

子邕に促されて孟郊は、

「叔父上が変であるのは、例えば、詩を見れば一番よくわかります」。

「ほう、私の詩は変なのかい」。

「いえ、詩は極めてまともです。詩を読んで、孟浩然という人はこのような人だろうと想像すると、およそ実物とは違っています。それでいて、叔父上は別に偽っている訳ではないのです。変ではありませんか」。

「詩と私とは、どういふところが違っているのかい」。

「表向きは似ていない阮籍の詩と叔父上の詩に共通するところがあると言ってもいいでしょうか」。

「強引に先ほどの自説に結び付けて来ましたな」。

「人には、普通、いわく言い難いどろどろしたようなものが心の奥底にあるわけではありませんか。叔父上の詩を見ると、さらさらと清らかな水が流れているかのように感じがします。だけど、本当のところは違うのです。叔父上は、それをどうして謝靈雲のように歌われないのですか」。

孟浩然は、初めて鹿門山に登った日に張野人に挑発されたのを思い起す。

あのとときから一筋の道をどれほど進んだのか。少なくとも洞庭湖からは一歩たりとも前に出ていない。

「君は私がそうするのを望んでいるのかい」。

孟浩然の問いに孟郊は、

「いえ、それでは叔父上の詩ではなくなってしまうです」。

「でしょうな。六郎兄さんが『舎舟眺迴渚』のような詩を詠んだら、寂しい

ですからな」。

「何だ、さつきおじさんが唱えた詩が謝霊雲のものだって、兄さんは知っていたではないですか」。

「だから最初から僕はそう言っていたでしょう。古来、謝霊雲の詩として知られてはいるが、元来はおじさんがここで作った即興の詩なのです。そう言いませんでしたかな。おじさんが朗々と吟じた声を、謝霊雲が永嘉で耳にして、あたかも自分の心から出た声だと感じて、自分の詩にしたのです。真相はそういうことです」。

「兄さんは、すぐに話を訳わからなくするのですから」。

孟浩然は、

「いまの説には、残念ながら、一つだけ訂正が必要だ。場所は永嘉ではなく始寧（しねい）だ。始寧は謝霊雲の郷里。叔父貴がこの漢水で詠んだいまの詩は、謝霊雲が郷里で聞くのにぴったりだ」。

子邕は額を叩き、

「やはり、先生の話聞いていなかったのですな。始寧でしたか。謝靈雲といえは永嘉とばかり思っていました」。

「都から追放されて永嘉に行った謝靈雲ではあったが、そのころの詩にはまだしもほんのり明るさがあった。その後、謝靈雲は中央に返り咲き、しばらく都にいたのだが、朝廷は自分とは相容れ難い所であると感じたのだろう、自ら職を辞して故郷の始寧に帰った。始寧での詩には明るさがない。しばらくすると都で政変があり、今度こそはと謝靈雲は中央に出て行った。そして刑死という不幸な最後へと突き進んだのだ」。

孟浩然是、張野人が謝靈雲の詩を詠じた心を思う。

孟郊は棹をぐいと突き立てて舟を止める。

「ここから舟を動かしません。この場で、この舟上で、僕等は永久に過ごすのです」。

子盦は艚から放して手を打ち、

「そいつはいい。君もたまには変なことを言う。僕等の仲間にしておいても

悪くないと認めようか。南園の普通でない仲間に入れたら、さぞ嬉しかろう。

からかうような孟邕の言葉に、孟郊は応じず、朗々と吟じる。

黔婁之妻有言 黔婁（けんろう）の妻が言いました

不戚戚於貧賤 「貧賤でもくよくよしない

不汲汲於富貴 富貴にもがつつがない」。

極其言 そのことを極めたので

茲若人之儔乎 この人もなかまであるのでしよう。

酣觴賦詩 酒を吞んで詩を賦し

以樂其志 それで自分の志を楽しませました。

無懷氏之民歟 無懷氏の民でしようか

葛天氏之民歟 葛天氏の民でしようか。

その余韻に被せるようにして、孟邕は一転して生真面目に、

「君はどうあっても止めたいのか。陶淵明の『五柳先生伝』の賛まで持ち出

して。そういう君を、僕は嫌いではないが、しかし、ここは違うのだ。

艫の先で水面を撃つ。

陶淵明は自身がかくありたいとして『五柳先生伝』を作った。昔むかしの世に、黔婁は妻に褒められた。そのまた昔に無懷氏や葛天氏の時代があり、民は天の定めのままに生きていた。五柳先生は、黔婁、あるいは、無懷氏や葛天氏の世の人のようにであったと陶淵明は記した。

孟郊は、

「僕を連れて、廬山を見に行ったのは、陶淵明に習うためではなかったのですか。思い出して下さい」。

孟浩然は言う。

「陶淵明は呑気に廬山を見ていたのではない。我が父は常に峴山を見ていた。陶淵明に習うのは容易ではない。我が父より鹿門山の詩を教わった。それから二十 years が経ち、私にはまだ峴山、鹿門山の真の姿が見えていない」。

「都に行けば見えるようになるのですか。叔父上は、どうして御自身を苦し

めようとなさるのですか。叔父上が本当に望むものはここにあるではありませんか。

「どうか、一郎兄さんには何も言わずにいてくれまいか。私が去ってから、都に行つたとは告げずにいておくれ」。

「父に引き留められるのを嫌がっているのですか。父は決して僕のように引き留めないでしょう。むしろ、叔父上が南園を離れやすくするでしょう。」

父はそういう人です」。

孟浩然は胸を抑える。

孟邕は言う。

「僕も、あの呑んだくれの親父さんには内緒にしておきましょう。知ったら、俺が行くと言ひ出しかねません。黴臭い南園から出たくてうずうずしているのですから」。

「父には言わずにおきます。父は全部を自分で引き受けてしまうのです。だから駄目なのです。わかっています、父を非難しても仕方ありません。僕が

自分ですればいいのです。いいです。叔父上は叔父上のお考えの通りになさって下さい。僕がいる限り、南園のことで叔父上に御心配をおかけするようなことはしません。いまずぐには難しいです。それはわかっています。しかし、必ずいつかはそうします」。

孟浩然はせめて何か孟郊に言おうと、

「私が出て行った後に、もしもひどく困るようなことになったならば、七郎君と洗然に相談するといい。君はしっかりしている。だけど、何かのときには、二人がきつと力になってくれる。見かけは頼りないようでも、あの二人は君のために何かしてくるはずだ」。

七郎は孟浩然と同年の孟馨、洗然は弟だ。

張野人は、

「ほう、あのお二人。それはまことに結構ですな。では、行きますかな」。

孟郊の手から棹を取り上げ、

「さあ、漕いでいただきましょう」。

孟浩然が艤を動かす。

張野人は舳先を北に向け、舟は水を遡る。

張野人は棹を使いながら、静かに吟じる。

不惜去人遠 昔の人が遠くに去るのは惜しみようがありません

但恨莫与同 いまをもにする人がいないのを恨むのです。

孤遊非情歎 情としてこの遊びが孤独であることを嘆くではありません

ん

賞廢理誰通 理として自然を賞することが廢れてはならないのです。

謝靈雲の詩の末尾だ。謝靈雲は山水の美を賞する心が自分一人で終わって

滅びてしまうのを恐れた。謝靈雲には、自分の詩が間もなく終焉を迎えたと

の予感があった。

張野人は引き止めようとしているのか。それとも、以前と同じく、一筋の

道を行けと挑発しているのか。

孟浩然是、一度は聞いてみたいと思っていたことを言う。

「叔父貴は、いつも、『何も隠しませんからな』と私のことをおっしゃいます。どうしておわかりになるのでしょうか。」

張野人は微かに笑い、

「坊ちゃんを見てわからぬ人がいますよ。坊ちゃんも、支離疏（しりそ）君を知っていますよ。顎がでれんと臍まで垂れ下がり、肩がぐいと突き出て頭より高くに盛り上がり、腿が脇の下に当たる格好でひよこひよこ歩いていけば、誰が見てもこれは例の支離疏君とわかります。支離疏君はそのような姿でしたから、お上が兵士を徴集するときも、人夫を徴発するときにも、一人だけ除外され、天の与えてくれた天寿を全うしました。身体が尋常でない支離疏君でさえそうだったのです、まして坊ちゃんは、その本性が尋常ではないのですから、誰が見たってわかりましよう。天賦の才を全うしないはずがありません。それだけのことです。」

支離疏は莊子の描いた人物だ。身体が支離滅裂であつたお蔭で天寿を全うし得たのだから、徳を支離滅裂にするならばなおさら天の与えてくれたもの

を全うできると、莊子は言った。

張野人は、思うがままに行けと言うのか。

これまで張野人が必ず近くに来てくれた。岳陽楼に登ってから病に倒れるまでの難しい時期にも、張野人は距離をおいて見てくれていた。張野人から遠く離れて、自分は何かを全うできるのだろうか。

日は再び陰り、舟上に冬の寒さが忍び寄り、四人は押し黙る。

彼方の空に、幾重にも濃い灰色の雲が重なる。都への道はその下にある。そこを行くと決めた。それは辿っていい道なのか。ためらいはない。袋小路と知って跳び込む。

都への道の間に年の暮れが迫る。冬はいよいよ深まり、灰色の雲から雪が落ちて来るだろう。

いつしか、地上はどこもかしこも白く、空もどこもかしこも白い。上と下の境も、前と後ろの境もない。

かしこに聞こえるのは、降り立つ場所を失って悲しげに鳴きかわす雁の声。

飢えた鷹が、立ち往生した獲物が斃れ伏すのを待って、集まって来る。自分はどうしてここに来てしまったのか。

爪先立って臨んでも、どこにも人烟を見ない。張野人の小屋より上がる煙に始まった一筋の道は窮まったまま先がないのか。

孟浩然は愁いに立ち竦む。

■ 晚泊潯陽望廬山

開元九（七二二）年、潯陽に舟を泊めて廬山を遠望した詩。香爐峰は廬山中の秀峰である。廬山の東林精舎に住んだ慧遠は、襄陽と所縁があり、陶淵明とは友人であった。

掛席幾千里　帆を掛けて幾千里もの旅をして来ましたが

名山都未逢　まだ名山のすべてに出逢ったのではありません。

泊舟潯陽郭　舟を潯陽の城郭のもとに泊めて

始見香爐峰

初めて香爐峰を見ました。

嘗読遠公伝

かつて慧遠の伝記を読んでから

永懷塵外踪

塵世の外の事績を永く懷つてここに來たのです。

東林精舍近

慧遠が住んだ東林の精舍は近くにあり

日暮但聞鐘

日暮れの鐘が聞えて來ます。

■ 春情

女性の恋情を歌った孟浩然には珍しい詩。

青楼曉色珠簾映

漆塗りの閨楼に掛る珠の簾に朝の光が及ぶところに

紅粉春妝宝鏡催

宝玉で飾られた鏡の前で化粧をしていますと

已厭交情憐枕席

あのころの情が溢れてまいります

相将游戲繞池台

手を取って池のまわりで戯れたこともありましたの

に

坐時衣帶縈穢草

いま行けば、衣に草がまつわりついて

行即裾裾掃落梅

落ちた梅の花を裾が掃くことになりましょう。

更道明朝不当作

どうせ明日になったところでは

相期共闘管弦来

あなたと管弦をともに奏でることはないのです。

■ 宿業師山房待丁公不至

孟浩然に夕陽を詠んだ詩は多い。襄陽の竜泉寺の業師の山房で丁鳳そ

いほうを待つているうちに夜になってしまったという詩。丁鳳に關

しては、都の本試験を受けるために発つのを見送った詩もある。

夕陽度西嶺

夕陽が西の嶺へとまわりますと

群壑倏已暝

谷は早くもすでに暝くなつてしまいました。

松月生夜涼

松にかかる細い月から夜の涼さが生まれ出て

風泉滿清聽

せせらぎから風のように清らかな音が聞こえます。

樵人歸欲尽

樵たちはもう山から帰ってしまい

烟鳥棲初定

鳥たちはちょうど山に棲みかを定めます。

之子期宿来
孤琴候蘿径

今夜はこの山房でと約束した君ですが
私は蔓草に覆われた道に向かって一人で琴を弾いていま
す。

■ 赴京途中遇雪

開元十五（七二七）年暮れ、都に行く途中での詩。

迢遞秦京道 長安への道は遥かに長く

蒼茫歲暮天 歳の暮れの空は捉えどころがありません。

窮陰連晦朔 天気はあくまでも暗く重く

積雪滿山川 山も川もどこも雪に覆われています。

落雁迷沙渚 雁は川のどこに降りたらいのか迷い

飢鷹集野田 そこらにいるのは飢えた鷹ばかり。

客愁空佇立 旅人は愁いのあまり呆然と立ち尽し

不見有人烟 その行く手には一筋の人烟もありません。